立香＆妖精騎士ランスロット＋α　in　ぼくのなつやすみ

ルルザムート

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

突如として小学生くらいまで退行してしまった立香とそれとほぼ同時に日本、広島県にて観測された特異点…

ご丁寧に黒幕（？）からの直接…と言えるのかどうか微妙なアプローチを受けて、シオンとダヴィンチは黒幕（？）に指名されたメンバー…手始めに立香と妖精騎士ランスロット、子ギルをレイシフトさせることを決定！

これでもかと黒幕（？）によって作り上げられた夏休みの舞台に立香達はどう満喫…もとい立ち向かうのか？彼らの夏休みが今幕を開ける…！

目次

夏休み0日目　彼の夏休み　――――　1
幕間　今回のイベントの首謀者『達』
15
8月1日　遂に始まった夏休み　―　21
8月2日　メリュと一緒にご近所探検！
――――――――――　29
8月3日　発見！秘密基地！　――　46
8月4日　あっち島上陸！　――――　59
8月5日　虫捕り　――――――　76

夏休み０日目　彼の夏休み

ノウム・カルデア、漂白された世界を元に戻すために唯一のマスターである藤丸立香は異聞帯との決戦に備え、サーヴァント達と共に訓練に勤しんでいた…のだが

「あわ、あわわわ…」

「お姉さん大丈夫？」

「いえ、あの、その大丈夫じゃないというかあの」

小学生くらいの男の子の手を引き、管制室を目指して歩く１人の少女

彼女はマシュ・キリエライト、カルデアスタッフであり唯一のマスター、藤丸立香と契約しているシールダークラスのデミ・サーヴァントだ、普段の彼女がこのように取り乱すのは珍しい事で、管制室を目指すのも専門家（？）が居るからである

つまりは自分で解決できない問題が発生してパニックになっているのである

「と、とにかく！早くダヴィンチちゃんの元へ！」

スタスタと歩く足が速くなる

こんな状態の先輩が他のサーヴァントの方達に見つかったら…

そう、そうなのだ、今マシュ・キリエライトが先輩と呼び、手を引いている男の子、彼

こそが人類最後のマスター、藤丸立香だ。もちろんこんな子供では無く、本来は大人とは行かなくともしっかりとした年齢である、つまり今ここにいるのは年齢退行した立香である

「まぁ、ますたぁ♡愛らしい姿ですね、普段のたくましいますたぁも好きですが、この清姫、そのような姿も好きでございます♪さぁさぁ、どうぞ私の部屋に…」

「お姉さん誰？」

「だ、ダメです清姫さん！マスターは今からダヴィンチちゃんの所で治療を受けに行くんですから！」

１番今合わせたくないサーヴァントの方の１人がいきなり来てしまった、このままでは先輩を連れ去られてしまうかもーーー

「むぅ…それでは仕方ありませんね、今は大人しくしています。」

あ、あれ？

予想とは違う反応に拍子抜けする、彼女…バーサーカークラスのサーヴァントである清姫から先輩へ向けられる尋常でない愛は知っている。（もちろんその点において私の方が劣っていると考えたことはありませんが）普段なら文字通り地の果てまで追いかけてきそうなものなのに…

「もしや…聞かされていないのですか？今ますたぁの治療のためにこの基地のサーヴァ

ントは何人か、管制室に向かっておりますわ。」
「そ、そうなんですか?」
　それは初耳だ、ダヴィンチちゃんに先輩が年齢退行したことを伝えたら『彼を連れて大至急管制室に!治療するからね!』としか…
「とにかく、早く参りましょう?ますたぁが困った顔をしていますよ?」
「へ?あっ」
「マシュお姉さん、この人だれ?」オロオロ
「私は清姫、貴方の将来のお嫁さんです♪」
「ちょっと清姫さん!?」
　いきなりそんなーーー
「ええっ!そんな…こんなかわいい人がお嫁さんなんて…嬉しいけど恥ずかしいよ…」もじもじ
　顔を俯かせて立香が恥じらう様子は清姫でなくともそれが嘘ではないとすぐに分かる程素直なものだった、そして肝心の清姫はーーー
「」←言葉の意味を考える　００．１秒経過
「」←理解してホントかどうか確認　００．２秒経過
!!!?????「」←ホントだと分かりつつも念のためもう一度確認　００．３秒経過

「　　」↑確認終了　００．４秒経過
「あの、清姫さーーー」
「　　」バターン!!
「お姉さん!?大丈夫!?」
　倒れるなんてものではない、高速で顔面から地面に激突するするように卒倒した清姫をあわあわした立香がゆすり起こそうとする
「あわわわ…だ、大丈夫ですか清姫さん!」
『もしもし?マシュかい!?』
「その声は…ダヴィンチちゃん!」
　以前女性のほうのマーリンさんから貰ったケータイが鳴り、出るとよく知る声が聞こえてきた、ダヴィンチちゃんだ
『急いでそこから離れるんだ!こちらでは探知できないが恐らく君らの近くに敵がいる!』どうやって入り込んだんだ…!?
「て、敵!?」
　探知のできない敵…!?一体どこにーーー
『ああ、君のすぐそばに居たバーサーカーのサーヴァント、清姫の反応が退去とは行かなくともいきなり弱った!恐らく敵に襲われーーー』

「あ、それは無いです、大丈夫ですよダヴィンチちゃん、敵はいません」
　驚いたがこれはダヴィンチの勘違いだろう、良かった…とマシュは胸を撫で下ろす
『え、でも…』
「ふ、ふふ…ダヴィンチさん、私は心配ありません、この通りなんともなーーー」グググ
ググ…
「お姉さん大丈夫？無理しちゃだめだよ！」
「　　」バターン!!
『ホントに大丈夫なのかい!?』
「ええっと…多分…」
　なんだか自信が無くなってきた、敵がいないのは自信をもって言えるがこのままでは
清姫さんが退去してしまうのではと…
「大丈夫ですよ、敵はいません、僕が保証します！心配でしたら僕が管制室まで護衛しま
すから！」
　少年の声にハッと振り返る
「ギルくん！」
「こんにちは！マシュお姉さん…と、マスター…ですよね？」
　ふむふむと立香を見つめる子ギル

「こんにちは！僕立香！」
「はい、こんにちは！僕はギル！よろしく！」
　仲良く挨拶する２人に思わず「ずっとこのままでも…」と思いかけてブンブンと頭を振る
「ギルくんも管制室に行かれるのですか？」
「そうですね、大丈夫だとは思いますが管制室まで僕が護衛しますよ！」
『うーん、それはありがたいんだけど清姫をこのままにしておくのも…』
「それも大丈夫ですよ、ほらそろそろ来ます」
　子ギルがそう言った直後、赤い服の看護師が敵を倒す兵士のような形相で角から飛び出してきた！
「発見っ！」がっし
「ナイチンゲールさん！」
「搬送っ！」ダッ
「「…」」ポカーン
「さぁ、行きましょう！」
「ギルくん、今のお姉さんは誰？」
「あの人はお医者さんの手伝いをする看護師さんですよ、今清姫さんを保健室に連れて

行ってくれましたからね、もう大丈夫！」
「そっか！良かった～」
「…」汗
いいのでしょうか…？
～
管制室にて…
「異聞帯？」
「違う違う、正真正銘の特異点さ！」
管制室に着くなりダヴィンチちゃんはいきなり特異点について話し始めた、シオンさんも黙って聞いているあたりきっと何かワケがあるのだろうと思い、口を挟むのはやめておいた
「それでね、その特異点が発生した時刻なんだが…これを見てくれ」
ダヴィンチちゃんが私と同じ種類のケータイを開き、画面を見せてくる（ちなみに彼女もマーリンから貰っていたのだが、うさんくさい、覗かれてる気がする、とのことで自分でイチから作ったものだ）
画面には先輩が年齢退行したことを伝えた私のメールが開かれている
「…？これは…私がダヴィンチちゃんに送ったメールですね」

「うん、時刻は今日、７月３１日のお昼１２時丁度、次にコレを見てくれ」ピッ
　近くのカルデアスタッフの使っている機械の画面を差すダヴィンチちゃん、そこには――
「…！これは…」
『特異点発生時刻７月３１日午後１２時』
「偶然というにはちょっと…ですね」
　子ギルが言う
「…無関係だと思うかい？私は思わない」
　た、たしかに…
　ここで黙っていたシオンが口を開く
「調査の結果、特異点発生と全く同時に立香さんにちょっかいをかけたサーヴァントがいるらしいんですよね、ここに。誰なのか特定する前に反応が消えてしまいましたが…マシュさんは立香さんと一緒に訓練していたようですがあなたの他に誰がいたのか覚えていますか？」
「それは――」
　ほんの３０分前のこと、もちろん覚えてる…はずなのに――
「…すみません、思い出せないです」

「あー、やっぱりそうですかー、まぁそこらへんはしっかりしますよねぇ…ま、特異点と言ってもほっとけば消えるレベルですしその気になれば立香さんも元に戻すこと自体は可能でしょう」
「…！ならーーー」
「問題はそれで黒幕が納得するか、だろう？すまない、少し遅れた」
「アーサー王！」
　入ってきたのは別の世界からやってきたブリテンの騎士王、男性のアルトリア・ペンドラゴンだ
「ご名答～そこなんだよね～、多分黒幕が満足するまで永遠に繰り返されると思うんですよ、だから思い切って立香さんをこの特異点へレイシフトさせようと思って」
「はい、先輩をレイシフト…ええっ!?い、今の状態の先輩をですか!?」
「??」←なんの話をしているか理解できていない
　どう見ても小学４年生くらいの彼を特異点にレイシフトさせるなんてそんなーーー
「うん、それについては私も賛成できないな、ねぇシオン？君が彼をレイシフトさせるに足る理由はあるんだよね？」
「ええ、もちろん！まず１つ、これがカルデア側の誰かが意図的に作り上げた状況だということ。２つ、異常なまでに守りの力…この微小特異点からは考えられないような聖杯

による守りの力を観測してること。これでは向こうが許可でもしない限りビーストだろうと入れませんよ。そして3つ、まぁこれが決定打になったのですが…これを見て下さい」

シオンもシオンで自分のケータイの画面を見せる…そこにはーーー

『きんきゅうれんらくさき、××—××—××　立香くんを見守る保護者より！※　少しは息抜きも必要だろう？』

というメールが。

「な、なんですかこれは…？」

マシュは理解が追いつかず、ダヴィンチは納得したような顔をし、子ギルは呆れ、シオンは苦笑い、アーサーに至っては『すまない、彼女がまた…』とブツブツ言いながら頭を抱えている

「まぁそういうわけなんで。もちろん立香さん1人で行かせるつもりはありません、それはこのメールにも書いてありますし」

「というと…？」

メールの内容を確認しようとしたところでまた扉が開く

「やぁマスター？…ああ、本当に小さくなっているね、大丈夫かい？」

「メリュジーヌさん」

いつもの鎧姿ではなく、可愛らしい普段着を着た妖精、妖精騎士ランスロットことメリュジーヌが管制室に入ってきた
「おや、来ましたか、出来れば全員揃ってからの方が良いのでしょうが…まー、また説明すればいいですかね」
「シオンさん?」
「うん、メールの内容をざっくり言いますと…立香さんとともにレイシフトするメンバーが指定されてるんですよね、招集をかけたサーヴァントはその指定されたメンバーですよ」
「私もその1人、レイシフトなんてしたことが無いからね、不謹慎かもしれないけどちょっと楽しみだよ」
ふふん、と笑うメリュジーヌ
しかしメールで指定されるなんて…一体黒幕は誰なんでしょう?
「えーと指定されているメンバーですがメリュジーヌさんに子ギルくんにーーー」
…
「結構多いですね、レイシフトはできるんですか?」
今までこんなに多くのサーヴァントをレイシフト同行させたことは無い…と思う
「普通は無理ですね、しかし今回は相手が場を作ってくれたようで…はい、何故できるの

かはまだわかりませんが、できますよ」
　そこに私が入っていなかったのは少し残念ですがそれだけのサーヴァント方が同行されるなら安心ですね！
「あとはですね…ん？」ピロン
　今のは…メールの着信音でしょうか？
「…趣味、良いとは言えませんね、彼女」
「…すまない」
「どうしたんだいシオン？…まぁ騎士王とキミの反応を見ればなんとなく分かるけど」
「？なんと書かれていたんですか？」
　というかこのケータイは私とダヴィンチちゃん、そしてシオンさんの３人しか持っていないはずなのに誰から…？
「あー…どうぞ」
　シオンがケータイの画面を見せる、そこには『前置きはもういいから早くレイシフトさせちゃって！』の一文が…
「…」
　これは…ちょっと酷いような…
「んー、悪意はあっても害意を持ってないのは分かるからいいんじゃないかな？サー

ヴァントも多いし」
『悪意も無いよ?』
「ま、待って下さい!先輩の意思を聞かないと…」というか今何か聞こえたような…
先程からずっと黙っている先輩の様子が気になる
「……ん?……ｚｚｚ」ウトウト
と、肝心の話の中心人物であるにも関わらずウトウトとしており、とても聞けるようなものでは無さそうだった
「ま、嫌がったら後ですぐこちらに戻せばいいだけですし、起きないウチにさっさとやってしまいましょうか!」
「分かったよ、マスターこっち」
「あっ」
止める間も無く流れるように立香を連れてシオンの元へ行くメリュジーヌ
「ありがとうございます…あ、あとで来たサーヴァントの方達にもちゃんと説明しておくのでそこはご安心を…ではダヴィンチさん」
「うんうん、おっけー♪今回は特異点修復というよりイベント方向のものだと思うし気軽に行こう!」
そんな、身も蓋も無い…汗

こうして先輩とメリュジーヌさん、ギルくんの３人が一足早くレイシフトすることになりました、場所は日本の広島県…カルデアのサーヴァントの誰かが用意したという例の無い事態に私にはどうなるのか予想がつきません…

「…？」

そういえばシオンさんが読み上げた指定されたサーヴァントの中にアーサー王は居ませんでしたが…何故彼はここにいたのでしょう？

幕間　今回のイベントの首謀者『達』

管制室にて…

「…これで全員、かな？シオン」

「ええ、メールにあったサーヴァント達は全員特異点…正確には『昭和６０年の広島県尾道市向島』にレイシフトが完了しました！…予想してはいましたが皆さんの位置が結構バラバラですね…」

「そんなことだろうとは思ったけど…でもまぁ今のところ敵性反応、魔力反応共に何処にも計測されていない、それに加えて立香くんの近くに何騎かのサーヴァントが確認できている、ひとまずは大丈夫だろう」

ほっ、とマシュやシオンを含めたスタッフ達（＋プーサー）が胸を撫で下ろしたのも束の間、いきなり胡散臭い声が基地中に響く

『やぁやぁやぁ！どうやら私の用意したシナリオに乗ってくれたようだね！うんうん、いいことだ！』

「この声…ああ、やっぱり…みんな本当にすまない、僕の不注意だ」

そして声を聞いた途端平謝りのプーサー、マシュがそれを慌てて止める様子をみなが

ら無言でシオンとダヴィンチの２人が計器をいじり始める…

『あれっ、無視？ひどいなぁ、まぁ聞いてくれてるようだし勝手に喋るよ～』

あっ、アーサー王、どこへ？

少し用事ができてね、ダヴィンチ？ここの通信機材借りて行くよ

おっけー♪

『こんなイベントを起こした理由は単純！暇だったからさ、あちらの世界も楽しかったけど最近、入った瞬間に待ち構えてた古龍達に袋叩きにされた挙句、恐暴竜のエサにされかけてね…』

プーサーが出て行ったのも構わず話し続ける女性

『流石にもうあそこには行けないから、新しくイベントを起こしたというわけさ！』ところでこの世界で私以外にｆｇｏというゲームの存在を知っている人物はいるのかな？

ダヴィンチにもシオンにも彼女の言っていることは殆ど理解出来ていない、だが言葉から一つだけはっきりと理解し、思った。

（つい最近、何処かの誰かにロクでもないことをした

んだろうねぇ）

んでしょうねぇ）

『うわぁここからでも分かる軽蔑の味！』

そりゃモブスタッフ含めその場にいる全員の気持ちが一つになれば夢魔でなくとも伝わるでしょう…

『まぁそれはそれとして！特異点における存在証明は私がやっておくからキミたちは安心してキミたちの夏休みを過ごしてくれたまえ！』

善とは思えないほどのこの勝手すぎる所業、それを２人がただ聞くだけで終わるだろうか？否、

「存在証明はこちらで行うのでご安心を、あなたの方こそ休んで下さい。ダヴィンチ？」

「うん、終わったよ！もしもしマシュかい？今から送るデータを持って騎士王と合流してくれ！」

『分かりました！』

『アレっ？アルトリアだけじゃなくていつの間にマシュも…どこに行ったんだい？』

「いえいえお気になさらず！すぐに終わりますよ！」

はぁ、（イベント開催は）いつものこととはいえ、トラブルが絶えませんね…ま！それがいいんですけどね！

「…ところでシオン？ゴルドルフくんとホームズを見かけなかったかい？」

「え？あ、そーいえば…」

〜

　ドンドンッ!と力強く、それでいて扉が壊れないように絶妙な力加減でされるノックが聞こえる
『マーリン!いるんだろう!ここを開けるんだ!』
『マーリンさん!円卓の方々が説明を求めています!せめて出てきて説明を!』
『めんどくせぇ!ンなもんブッ壊しちまえばいいじゃねぇか!』
『それはダメですモードレッド!』
『マーリン!貴方という人は…!』
『私は悲しい…』ポロロン
「あっはっは!おっそろしいことになったぞう!」ケラケラ
「その割には楽しそうだねキミ!?ひいいい!な、なぜ所長の私が味方に怯えなければならないのだ!と、扉が破られる!」
　扉を押さえつけたところで意味は無いのは分かっていたのでケラケラと笑うマーリンを盾にする形で部屋の隅で震える現所長、ゴルドルフ・ムジーク…今はマーリン以外誰も知らないが彼もマーリンと並ぶ今回の事件(イベント)の首謀者である
「なんか文字が勝手なことを言っているけど違うからね!?私はただ現所長として!戦いに明け暮れているあの藤丸立香をリフレッシュさせるプランを私なりに作っていただけだ!第一今回のコレ!私の作ったプランと合っているのは『藤丸立香に夏休みをプレ

ゼント』というところだけではないか!なんだ夏休みの特異点って!」←超早口
「そして実行に移したのがこの私というわけさ!（ガン無視）いやぁ、我々の見事な連携にみんな私1人でやったと騙されているね!!!（←強調）」
『なんだと?ゴルドルフのヤツ…!』
『まさか所長もマーリンと一緒になってふざけているとは…』
『あの、所長?それは本当ですか?いえ、先輩のためを思って作ってくれていたのは嬉しいのですが…もう少しどなたかに相談というか…』
　ドンドンと扉を叩く音がなくなり、代わりにミシミシ嫌な音が扉から聞こえて来る
「ひいいい!何故、なぜこんなことに?マーリン!責任を取りたま…え?」
　もぬけのカラーン
「…」
　ふと、先ほどまでマーリンのいた位置に一枚のメモ用紙が落ちているのを見つけ、手に取って読む
　今回の夏休み、私も参加するからね!いやぁ～『近所に越してきたどこかイケナイお姉さん』枠!楽しみだなぁ～
「　　」ガクッ
　ああ、扉が破られる

マーリン！ゴルドルフ！マーリン！所長！マーリン！
円卓の声が大きくなってそれでーーー
：記録はここで途切れている

8月1日　遂に始まった夏休み

「…ふぁ」

窓際の席に座って外を眺める1人の少年…藤丸立香、今は親戚の家に向かう新幹線の中だ

「やぁやぁ、そこのキミ?これからどこに行くんだい?」

「ん」

にこやかな銀髪のお姉さんが『どこに行くの?』と、聞いて来たので答えようとするが…

「ええと…なんとか海?ごめん、ちょっと分かんないや」

そういえば漢字の読み方が分からなくて海しか読めなかったんだ

「ということは海かな?1人で大丈夫かい?」

「うん大丈夫だよ!」

もう4年生、新幹線くらい1人で乗れる。…切符はまだ1人じゃ買えないけど。

そうかそうかと笑顔を崩さないお姉さん、そこから少し仲良くなって夏休みの予定など他愛のない話をしていると…

「…海」

トンネルから抜けた瞬間見えた景色に自然と僕とお姉さんの言葉が重なる

そろそろかな？

お母さんから貰ったメモを見ながら降りる駅をもう一度確認する…

って、もう次の駅だ！

大急ぎで荷物をまとめて降りる準備。

気付いて良かったぁ…

「おや、もう行くのかい？」

「うん、お姉さんありがとう！」

よいしょとお姉さんの前を通って出入口へ向かう

「うんうん、夏休み…キミのためにイチから設定し直した夏休みを是非楽しんでおくれよ？」…ところで私の配役が予定と違うんだけど…？え？そもそもそんな枠は無かった？ん？

『祝！プーリンの出番、これにて終了ッ！』

ええっ!?ちょっと待っーーー

…

何か聞こえた気がしたが、その時慌てていたので気付かずに出入口へ、新幹線が止ま

り扉が開くーーー
「着いた！わっ!?」
　出ると同時に何かに…いや、誰かにぶつかって転びそうになるが…なんとか耐える
「ご、ごめんなさい！」
「…どこでも大体そうだが、いきなり飛び出すと危ないぞ、ケガはないかね？」
「あ、ありがとうございます、大丈夫です…あ」
　顔を上げてその人を見てみるとーーー
「ふむ、それなら良かった…新幹線の長旅、ご苦労様だ立香。」
「エミヤおばさん！」
　親戚のおばさん、エミヤおばさんだった！もう来てくれてたんだ！
「お、おばっ…!?ゴホン、重いだろうし荷物を持とう、バスの時間までそう無いからね」
「うん！」
　そしてーーー

　バス停　潮待ち桟橋にて…
「さぁ着いたぞ、足元に気をつけて降りたまえ」
　言われた通り注意してバスから降りる

「わぁ…」
　海の匂いがする…
「こっちだ」
　そのままおばさんに連れられて海の匂いが強い方へと歩いていく…
「ん？お？見知らぬガチンチョがいるな？誰だお前は？」
　堤防付近に滞泊している７５号と書かれた船、その近くでアロハシャツを着た青髪の男が釣竿片手にニヤニヤしながらこっちを見てきた
「僕は立香、藤丸立香だよ！お兄さんは釣り師なの？」
「半分正解だ、俺は釣り師で船乗りなのよ！」
「彼はお兄さんで何故私がおばさんなのだ…？」
「…あそーだ、お前釣竿持ってるか？」
　思い出したように釣り師のお兄さんが質問してきた
「持ってないよ」
「んじゃ予備があるから明日持ってきてやるよ、んで俺と一緒に釣り行こーぜ」
「ホントに？ありがとうお兄さん！」
　いい場所知ってるからよ、その時は勝負だぜ！と屈託なく笑うお兄さんにお礼を言って、おばさんと一緒におばさんの家へ

「ねぇおばさん、向こうに見える島はなに？」
　その途中で海を挟んでそう遠くない距離に見えた島について何気なくおばさんに聞いてみた
「む？ああ、あれは『あっち島』あっちの島だからそう呼ぶようになったそうだ、ちなみに今私達がいる島が『こっち島』名前の理由は…まぁ似たようなものだ」
「ふーん」
　そんなこんなで着いたおばさんの家、出迎えてくれたのはーーー
「立香、久しぶりだね！」
「メリュ！」
　銀の髪を揺らして家から飛び出してくる少女、メリュジーヌ。呼びづらいのでメリュって呼んでる、昔からの仲良しだ！つい最近も会って…えーとアレ？どこで会ったんだっけ…？…ま、いっか！
「いらっしゃい、立香」
「アルおじさん！こんにちは！」
　不思議な感じもすぐに吹き飛び、メリュに続くように出てきたアルトリアおじさんに挨拶をする
「おじ…？まぁとにかくお疲れ様です、メリュ！」

「うん！こっち！」てってってー
　ギリギリ走りと言えないくらいの早足で駆けていくメリュに頑張ってついていく
「あ、モルモルもこんにちは！」
「ええ、待っていましたよリッカ…」ニコッ
　途中ですれ違ったモルモル…えっとモルガンさんにも挨拶をして…そのまま2階へ
　今は関係ないけど今すれ違った人…モルガンとも僕は仲良し！勉強とかも教えてくれて今ではあだ名で呼び合うくらい！
「ここだよ」
　そんなこんなで2階の二つのうちの一つの部屋に案内されて、荷物を置く
「ありがとう！えっと…2つあるけどベッドはどっちを使えばいい？」
「こっちの窓に近いベッド、もう一つは私のだから。」
「うん！分かった！」
　コンコン
「…？なんの音？」
　ノックみたいだけどドアからじゃ無いし…
「ああ、入っていいよ」
　メリュがそういうと何故か押し入れが開きーーー

「失礼しまーす、こんにちは立香！」
「ギルくん！こんにちは、久しぶり！」
メリュと同じくらい仲良しのギルくんが押し入れから出てきた！…でもなんで押し入れから？
「もー、押し入れを通路に使わないで？」
「まぁまぁ、いいじゃないですか。秘密の通路みたいで面白くて。」
軽口を叩き合う2人を見て少しだけ不安になる…この全く知らない場所で1ヶ月過ごすという事実に、だがーーー
「大丈夫だよ立香」
それを察したのかメリュが声をかけてくれた
「最初は不安かもしれないけどここもいいところだからね、すぐに慣れるよ」
「1番の不安点は立香がここを気に入りすぎて帰りたくなくなる事くらいじゃないかな？」
そういって笑う2人に僕の気持ちもすこしほぐれた
「…うん！これから1ヶ月よろしくね！」
…
今日から始まる夏休み…例えそれが作られた偽物だったとしても気持ちまで嘘にな

ることは絶対にない、彼は…彼らは自分がマスター／サーヴァントであることを今この時間だけは忘れ、夏を楽しむ。

…8月1日、ここで過ごす夏休み、最初の1日目が終わった。

8月2日　メリュと一緒にご近所探検！

「…」
ん…
ぼんやりとしたまま寝返りをうつ…
…？
なんだかいつもと布団の感触が違う…？
「……」
そういえば夏休みはおばさんの家で過ごすんだったっけ…だから布団じゃなくてベッドだしーーーあ
気付くと同時に流れ始めるラジオ体操の音楽！
「わぁっ！メリュ起きて！」
「ンヒャ!?」
転がす勢いでメリュを揺すり起こして外へダッシュ！
裸足のまま靴を履き、みんなの元へ
やった！間に合った！

ここに来て初日からラジオ体操のハンコが貰えなかったって知ったら先生がギャオギャオ怒るに決まってる!

『ほーうほう?初っ端からラジオ体操をサボる…うんうん、これは先生(ジャガー)に対する挑戦と受け取っていいんだなァ!?』アタマぐりぐりィ!

『ギニャーッ!?』

なんて事に…!

それだけはダメだ!と、エミヤおばさんの横に並び、朝のラジオ体操にギリギリで参加することができた僕であった…

〜

「朝食が出来たぞ、座りたまえ」

はーい、色んな方向から声がしてみんなが食卓に集まる

「美味しそう!」

焼き魚のいい匂い、ほくほくとした白米とお味噌汁がテーブルに並べられていたのだが…

「おばさん、ここはみんな沢山食べるの?」

「む?…ああ、すまないね、この家に住む人はみんな大盛りだから忘れていたよ」

お皿に盛り付けられている量が全体的に多く、おじさんのお皿に至っては僕の3倍く

らいありそうだ
「多いと思うのなら少し減らそうか？」
「減らさなくていいよ、僕おばさんの料理大好きだから！」
　いつ食べたのか思い出せないけどエミヤおばさんの料理がとっても美味しいってことだけは覚えてるんだ！
「そう言ってくれると作りがいがあるよ…っと、そうだ、メリュジーヌを起こしてきてくれないか？どうやら二度寝してしまったようだ」
「うん、分かったよ！」
　あー、メリュ寝ちゃったか～なんて思いながら階段を上がって部屋へ
「メリュ？朝だよ！」
「んぐぐ～むやぁ…あと少しだけ…」
「…」
　コアラみたいにがっしりと掛け布団にしがみついて離れないメリュ
　…ヨシ！
　こういう時にやる事は決まってる！
「起きないと…こうだ！こちょこちょこちょ～」
「…!?きゃっはははははっ!?ま、待っはははは！起きる！起きるからっはははは！」

くすぐりの刑だ！
ベッドから転がり落ちてさらに転がりまくるメリュをさらにくすぐる！
「目は覚めた？」
「こ、こんの～えいっ！」ガバッ
え！
一瞬手を止めたのが悪かったのかゴシーンと体当たりしてきたメリュが僕が今やったことをそっくりそのままやり返してきた！
「お返しだよ！」
「わっ!?ははははは!?うわぁごめんっははははは!!」
逃げる為に床を転がってもメリュの手はどこまでも追いかけてくる！
「私からは逃げられないよ！こちょこちょこちょ！」ドタバタ
「わーっははあはははは!!このぉ～っ！」ジタバタ
くすぐり、くすぐられのくすぐり合戦は『ご飯が冷めちゃいますよ』と言いにきたギルくんの一言で終了し、僕たちは1階へ降りた
～朝食後～
「ごちそうさまでした！」
「「「「ごちそうさまでした！」」」」

「メリュジーヌ、今日は島を案内してあげたらどうかね？まだ立香はここに来たばかりで何も分からないだろう」
　と、エミヤおばさんが言う
「うん、そのつもり。立香、歯磨きが終わったら家の前に来て、一緒に島を周ろう。」
「うん！分かったよ！」
　朝ごはんを終えた僕はメリュと約束をして洗面所へ
「虫歯になるのは嫌だからね…」シャカシャカ…べっ
　歯磨きを終えて歯磨きカードに朝のハンコを押す
「これでよし！」
　ぺいっと歯ブラシを片付けて家の外へ
「メリュ！」
「来たね、じゃあ行こう！」
　そのままメリュと一緒に家の横にある物置へ
「これはキャメロット家の倉庫…物置だよ、ロンゴ…なんとかっていうのが入ってるくらいで珍しいものはなーんにも入ってないよ」
「そんなどーでもいいことまで教えてくれなくてもいいよ～」
「遠慮しないでいいよ、えーと次は…」

おもむろに近くのコンクリートブロックを持ち上げるメリュ
「あれ、今日はなんにも居ないや」
「何してるの？」
「コンクリートをめくってその下に虫が居ないか見てるんだ。確か立香、昆虫採集セットを持ってきていたよね？役に立つと思って。」
「うん、ブロックの下を探すっていうのは気付かなかったよ！」
夏休み間の目標の1つ、それは虫をたくさん集めることだ！虫が苦手なモルモルには話してないけど…
「じゃあ次、こっち」
てってって～と走っていくメリュを追いかけていくと徐々に大きくなっていく蝉の声が聞こえ、また最初から大きい木が見えてきた
「うわぁ…おっきな木だね…」
「うん、精霊の木って名前でずっと昔からあるんだって…あとこの木には他の木には無い特徴があってね…」
他の木には無い特徴…？…あ！
「もしかしてカブトムシの木？」
「うん、カブトムシとかクワガタが採れる木なんだ！…うーん、こっちも今日は何にもい

ないか…あ、砂糖水いる？」
「うん！」
じゃあコレ！と『胃薬』と書かれた小瓶をメリュから貰う
「中はちゃんと砂糖水だから安心してね、あとは…うん、こっちかな？」
再びてってって～と走っていくメリュ、それを追いかけようとしたところで…
「よう！」
虫網を持った、碧い目をした金髪少年（背は僕より高い）に声をかけられた
「や！」
「俺は坂田金時だ！お前は？」
「僕は藤丸立香！夏休みの間だけキャメロット家に引っ越してきたんだ！」
「そっか！んじゃお隣さんだ！よろしくな立香！」
「よろしく金時！」
電撃のようなスピードで自己紹介を終えた僕らはがっしりと握手をする
「ホラ、お前も自己紹介！」
「…う、うん」
…と、金時の後ろから自信なさそーに僕らより一回り身長の低い少年が顔を出す
この子髪の毛が長くて顔が見えづらいなぁ…

「こ、こんにちは!僕は、風磨小太郎!えっと、うん、よろしくね!」
「よろしく!」
「…?小太郎、なんか今日は元気無いな、大丈夫かよ?」
「いや、金時君みたいに凄い堂々とした自己紹介の後だとやっぱり自信がちょっと…」
どうやら話す事が苦手って訳でも無いみたいだ
「立香～、何してるの?早く来て～」
!
メリュの急かす声が聞こえる
「あっ!メリュごめん!僕行かなきゃ!」
「気にすんなって!女の子を困らせちゃダメだからな!次は遊ぼうぜ!」
「うん!またね!…小太郎君もまたね!」
「うん、また!」
2人に手を振って別れ、急いでメリュの元へ走る
「もー、遅いよ」
「ごめんごめん!えーと、ここは?」
見たところ郵便局だけど
「ここは郵便屋さん、この島で一つだけのね、小さな島だけど手紙がいっぱいくるからい

つも大忙しなんだって」
「へ～」
「さて！じゃあ今回の1番の目玉、ＮＦＦ商店（光）に行こう！」
　再度てってってー、と駆け出すメリュ
「えぬえ…？あっ！待ってよ～！」
　言葉の意味が分からないまま頑張って追いかける
　昔からメリュは足がとっても速いから追いかけるだけでヘトヘトだよ…
「テレビさんこんにちは！」
「はいこんにちは！…それとワタクシはテレビさんではなくＴ（タマモ）Ｖ（ヴィッチ）コヤンスカヤ／光という名前があるのですが…」
「…長すぎて呼びづらいよ」
　ＮＦＦ商店と書かれた看板を掲げた家…？の表には若干困った顔をした桃色の髪の綺麗なお姉さんがバニーガール？みたいな格好で椅子に座ってメリュと話していた
「あっ、立香！この人がテレビさん、このＮＦＦ商店の店長さんだよ！」
「こんにちはテレビさん！」
「ああ…また間違った認識が…はぁ、仕方ありませんね。」
「ここは何を売ってるの？」

「色々な物を取り扱っていますが…ええ、あなた方が欲しがりそうな物はこの辺りでしょう」
　そう言っていくつかの商品を手で示していくテレビさん
　おにぎりにコロッケ、高そうなプラスチックの水槽にーーーあ
「モンスターチョコもあるんだね」
「ええ、流行を掴むのは商売の基本ですので♡」…にしても召喚されて早々に夏休みを盛り上げて～とか…ワタクシが言うのもなんですが人理を守る気あるんですかねぇ…？
　テレビさんが何か言ったような気がしたが特に気にすることもなくメリュと店を見て回る
　あ、ちなみにモンスターチョコというのはとあるゲームに出てくるモンスターの形を模した消しゴム…モン消しがオマケとして入っているチョコレート菓子だ、いくつ種類があるか分からないけど、中にはレアなモン消しもあるらしい…
「私も一時期集めてたんだけど…レアなモン消しは大抵あの子に先を越されちゃうから諦めちゃった」
「あの子？」
「…そうか、立香はまだ会ったこと無かったね、まぁいずれ分かるよ」
　頭の中は???だったが考えても仕方ないし今は忘れることにした

「あー、あと当店はビンの引き取りもやっていますので～空きビンを見つけたらこちらに～」
「ビンの引き取り？」
「うん、ここは空になったビンを引き取ってくれる場所でもあるんだ、海の中を泳いでたり道を歩いてたりすると空きビンを見つけることがあるんだけど…それをこの店に持って来ればお金と替えてくれるんだ、近所の子供達はそうやってお小遣いを稼いでいるよ…じゃあそろそろ最後の締めだ、こっち！」
　またまたてってって～と今度は浜辺走っていくメリュを追いかける
「以後ＮＦＦ商店をご贔屓に～」…まー、ここ以外に店は無いんですが。
　桟橋の上で向かいの島、あっち島を見据えるメリュの元へ
「こっち島とあっち島はそこまで距離が離れていないからね、泳ぎが得意なら向こうまで泳いで行けるんだよ。…でも向こうは壁が高すぎて上がれる場所が無いから上陸出来ないんだけどね」
「ふーん」
「お、なんだなんだ？デートか？」
「え、ええっ!?違うよ！」
　突然の横槍でびっくりして変な声が出る

というか今の声は…
「ははは！そうかそうか、まぁそういうことにしといてやるよ！」
「アロハの兄貴？」
ここに来た時最初に会ったあのアロハシャツの兄貴だった！
「おう！姿が見えたんでな、コイツを渡しに来た」
ほらよ、とアロハ兄貴から釣り竿を含めた釣り道具一式を貰う
「ありがとう！」
「今はにっちもさっちも分かんないだろうが…ま、ここに慣れてきたらまた声かけてくれよ、いい釣り場教えてやっから！」
「うん！」
お礼を言って兄貴と別れる、とーーー
「メリュ？」
「む～」じとー
な、なんだ…？なんかメリュが膨れてる…
「…はい、とりあえずご近所の案内はこれでおしまい！じゃあ私用事あるから！」
「ちょ、ちょっとメリュ？」
ぷいっ、と回れ右してメリュはそのままどこかへ行ってしまった…

「もー、なんなんだよー?」
僕は意味が分からずただその背中を見送るだけだった…

その夜…
「そうだ立香、貴方はこの島の伝説を知っていますか?」
「伝説?」
夕ごはんを食べた後、アルトリアおじさんに聞いた不思議な話
「ええ、この島には島ができた時から存在する伝説が1つ…この島には住む者なら誰もが知っているものです」
「ねぇねぇ、どんな伝説なの?」
伝説なんてワードを聞いてテンションが上がらない子供は居ない!僕はテーブルから身を乗り出しておじさんに話の続きをせがむ
「ふふ、伝説は逃げませんよ?…言い伝えではこの島の何処かに、財宝が眠っているそうです」
「財宝!?」
凄い!…でもーーー
「誰が隠したの?」

「それに関してはよく分からないのです、ふらりと立ち寄った旅人か、もしくは魔法使い、この世界の者では無い人物とも…ですが地図がある以上は財宝もあると考えていいでしょう」
「地図があるの!?」
　ここで僕のテンションは最高潮!テーブルの上に身を乗り上げて話を聞いていた!
「こらこら、お行儀が悪いですよ?…これですね」
　と、手渡されたのは宝の地図ーーーの一部分らしきものだった、そこにはこの家の近所の地形が細かく書かれている…
「私にはこれ一枚しか見つけることは出来ませんでしたが…どうでしょう立香、地図を集めて財宝を探し出す、というのを夏休みの宿題にするのは?」
「!」
　そんな面白そうなことやらない理由は無い!
「うん!僕やるよ!…でもおじさんは財宝要らないの?」
「ええ、財宝より素晴らしい物を貰っていますから」
　財宝より素晴らしいもの…?
「貴方もいずれ分かりますよ」
「うーん?うん、そっか分かった」

こうして僕の夏の大きな目標が決まった、1ヶ月掛けた宝探しである！
そうと決まったらこうしてはいられない、明日に備えて今日はもう寝なければ！
「じゃあ僕はもう寝るよ！おやすみ！おじさん！」
「おやすみなさい立香、でもちゃんと歯磨きしてから寝ましょうね？」
「はーい！」
僕は急いで歯磨きを終わらせ、期待でいっぱいになった胸を落ち着かせながら2階へと上がって行った…

…

「…ふふ、日々戦いに身を置いていた貴方（マスター）、かつての私のように常に戦い続けてきた貴方が、こうして笑って日常を過ごしている…それを見れただけでどんな財宝よりも価値はありました。
もしカルデアで夏休みの話をすれば貴方はきっと『まだ日常を楽しむのは早い』と言って傷だらけの顔で笑うでしょう。
ですが私はそうは思いません、サーヴァントの我々と違い貴方は人間、常にその瞬間が最も若く、童心に近いのです。もちろんマーリンの独断は褒められるものではありませんが…たまには楽しんだってバチは当たらないでしょう」
「ふむ、確かにその通りだ、ならば君ももっと羽を伸ばしていいのでは無いかね？セイ

バー」

台所を片付け終えたエミヤにそう声を掛けられる

「アーチャー？…しかし妖精騎士だけならともかくモルガン義姉が近くにいるという状況下で羽を伸ばすというのは…」

「確かに人選に少々疑問を感じるが…少なくともモルガンはお前のことを気にしてはいないようだぞ」

あれを見たまえ、とエミヤが指し示す方向にはーーー

「美味しいですね…ところでギル、お代わりはないのですか？」

「アイスは1日1本までですよ、他の方の分が無くなってしまいますし」

ーーーギルガメッシュ（少年）と一緒にはむはむとアイスをモルガンが見える

「私は心配いらないと思うがね、当事者の君に部外者の私が軽々しく意見する訳にも行かない、だがどうしても気が休まらないと言うのであれば教えてくれ。私がなんとかしよう」

「いえ、ありがとうございますアーチャー、ですが大丈夫です。かつての因縁があろうとカルデアに呼ばれた以上は共に戦う仲間、仲間として互いを知るにはいい機会です。」

ふむ、そうか…とだけ言ってエミヤは再び台所へ、明日の朝食の準備をするのだろう

「…」

そうして1人残されたアルトリアがモルガン達からアイスを分けてもらうにはどうしたらいいか?と数十分正座で考えることになるのだが…それはまた別の話…

…8月2日、2日目の夏休みが終わった

8月3日　発見!秘密基地!

キャメロット家　リビングにて…

「ごちそうさまでした!」

「「「ごちそうさまでした!」」」

朝食を食べ終え、歯磨きも終えた僕は早速家の外へ

「さて、今日はどうしよう?」

昨日メリュと近所を見て回ったとはいえ、行ってないところはまだまだ沢山ありそうだ

「いきなり地図を探しにいくのも難しいし…今はとりあえず行けるとこまで行ってみよう!」

…とは言ったもののどこから行こうかな…?

「おや、見ない顔だ、初めまして!」

「あ!初めまして!」

声をかけてくれたのは僕よりちょっと高い身長に、肩まで届く金色の長い髪が特徴的な男の子だ、”ぐらんどおーだ!”とひらがなで書かれた白シャツと…下は短パンを履

いてる
　大人っぽい雰囲気…6年生かな…
「多分君がキャメロット家に越してきた子だね、良ければ僕と一緒に少し散歩をしないかい？」
「散歩？うん！行きたい行きたい！」
　というワケで僕ら2人は一緒に行動することになった！
　どうやら彼は本を返しに学校に行く途中だったようで僕もそれについて行く事にした
「へぇ、夏休みの間だけの引っ越し？」
「うん！メリュとギルくんとモルモルとアルおじさんとエミヤおばさんと犬のタイコー、夏休みの間みんなと暮らすんだ！」
　精霊の木を通り過ぎ、背の高い2本の木が作った日陰の道を2人で歩く
「ところでキミは何の本を返しに行くの？」
「うん？ああ、この島で採れる虫について書かれた図鑑だよ、内容はもう大体覚えたから本を返そうと…あ」
　階段を登り、ちょうど学校のグラウンドに入ったところで彼が立ち止まる
「…？どうしたの？」

「…返すはずの本を家に忘れてきてしまったよ!」
「なんだそれ!」
　じゃあ何のために来たんだよ!とついつい笑ってしまう
「ははは!ホントだね!あははは!」
　それにつられて彼も笑い出す
　ひとしきり笑ったところで散歩再開、グラウンド横の細道を歩いて森の奥へ向かう
　無造作に置かれた4枚のドブ板と眼下に見える学校を見ながら僕はある事に気付いた
　…そういえばこの子の名前を聞いてないな
「ねえ、そういえばキミの名前ーーー」
「ああっ!大変だ、コレを見てくれ!」
　慌てた様子の彼に名前を聞くのも忘れて急いで前へ!すると…
「橋が壊れてる!」
　森の奥へと続く橋の底が抜けて通れなくなっていた!
「うーん、残念だね…」
「いや…でもジャンプしたら届くかもしれない、ちょっと下がっててくれ!」
　そう言って彼はどこからか縄跳びを取り出し、ムチのようにギュッと両手で持つ

え！

これを飛び越えるのは6年生でも…いや、大人でも難しいんじゃ…そもそもなんで縄跳びを？

「やめたほうがいいんじゃない…？」

「大丈夫だよ！よし…行くぞ！3！2！いーーー」

「だあああああっ!!待て待て待て!!!」

彼が足を踏み切るまさにその直前！ドドドド！と恐ろしいスピードで走ってきた銀髪の少年がアメフト選手みたいに腰にガッシリとしがみつき、そのまま倒れ込んで彼のジャンプを止める

「カイニス、離してくれ！今の僕は行けそうな感じなんだ！」

彼はしがみつかれたまま、地面でジタバタとカイニスと呼んだ少年を振り解こうとしている

「どう見たって無理だろ!?大体なんで縄跳びなんて持って…いや待て、お前…昨日の夜映画見てたが何の映画見てたんだよ？」

「インディージョーンズだけどーーー」

「思った通りだ！いいかオイ!?あれは映画だ！本気にするな！」

それを見てなんて声をかけたらいいか僕には分からなかったからただボーゼンとそ

れを見ていることしかできなかった

〜

なんとか彼を説得して来た道を3人で戻る

「ったく、ヒヤヒヤしたぜ…あ、俺はカイニスだ!お前はなんて言うんだ?」

バスターと書かれた赤いシャツと短パンを身につけた彼…カイニスが聞いてくる

「僕は藤丸立香!キャメロット家に夏休みの間だけ引っ越して来たんだよ!」

「あー!お前がメリュが言ってた…へー!ほー!ははっ!また秘密基地で一緒に遊べるやつが増えたな!」

…ん?

「あのさ、カイニス…さん?」

「カイニスでいいぜ!んで、どーした?」

「秘密基地ってなんのこと?」

「……んあっ?」

僕の質問に一瞬固まるカイニス、そしてーーー

「お前、秘密基地知らねーの?」

「うん」

「場所を?」

「場所というか秘密基地があるなんて今知ったよ?」
「…そうか」
　な、なんだかカイニスの顔がどんどん怖くなっていってるようなーーー
「……コリャ許せねぇなオイ!?」
「え、カイニーーーうわっ!?」
　ドンッ!とさっき駆けつけた時と同じかそれ以上の速さで駆けていくカイニス、その背中はあっという間に見えなくなってしまった
「…行っちゃった」
「ああ、彼の友人として一応言わせてもらうと彼は不器用なだけで友達思いのいい人だよ…あんな風に自分でなんでも解決しようとして、1人で行ってしまうこともたくさんあるけどね」
　…そうなったのは多分キミのせいじゃないのかな…?と思ったけど口に出すのはやめておいた
　〜
「ここ?」
　彼に連れられてやって来たのは潮待ち桟橋、その橋の下へ続く階段だ
「うん、彼はここに来てると思ーーー」

「オイゴラァァ!!」
「ごめんなさーい!!!」
　うん、来てるね!と冷静に言う彼に若干戸惑いつつも一緒に階段を降り、桟橋の下へ、するとーーー
「いたいいたいいたい!暴力はんたい!頭が割れちゃう!」ジタバタ
「1人だけのけものにしようとしたお前が悪い!」ぐりぐり!
　僕がジャガ村先生にやられてるみたいに頭をグーでぐりぐりされてるメリュが…ちなみにぐりぐりしてるのは言うまでもなくカイニス君だ
「カイニス君落ち着いてーーー」
「小太郎は口挟むんじゃねぇ!仲間外れにすんのは誰だろうと許せねぇンだよ!」
「だがよー、男が女に手をあげるってのはダメだろ…?」
「うっさい!金時も口を挟むなよ?これは先輩としての指導だ指導!」
　見れば金時君と小太郎君もいる…あ、ギルくんも来てる!…でも1人だけ知らない子がいるなぁ…?桃…いや紫色の髪をした女の子だ、メリュにも負けないようなかわいい洋服を着てる!
　…背が1番大きいから6年生かな?
「まぁまぁ…落ち着いてくれ、彼が困っているよ?知らない人も居るかもしれないから

自己紹介から始めないか？」
「あー…あー、お前が言うんじゃ仕方ねえなぁ…」
むー、と若干不満そうな顔をしながらも渋々涙目のメリュから離れるカイニス
「ありがとうカイニス、じゃあ誰から自己紹介しようか？」
その言葉に誰よりも早く答えたのはあの背の高い知らない女の子だった
「はーい！はいはいはーい！私、自己紹介したい！です！」
「ふむ、じゃあちょうどいい、低学年の人から順番に自己紹介するとしよう、みんなもそれでいいかな？」
はーい、とかおう、とかうぇーいとか、そんな同意の返事が返って来た事で女の子は自己紹介を始めた
…アレ？低学年から？じゃあこの子はーーー
「こんにちは！私はプロテア、キングプロテア！1年生！です！」
「いちねんせい!?」
思わず聞き返す！
「えへへ、みんな最初は驚くんです！よろしくね！」
そう言って無邪気な笑顔で手を振る彼女を見て、子供ながらに『ああ、たしかに1年生の女の子だなぁ』と思った

「じゃあ次は私」
　次に話し始めたのはメリュだった、なんだかバツが悪そうな顔をしてるけど…?
「改めて自己紹介するのも変なカンジだけど…私はメリュジーヌ、3年生。よろしく、立香。…あと、いじわるしてごめん」
「気にしてないよ、改めてよろしくねメリュ!」
　後で知った事だけど昨日の近所探検で砂浜に行った後、秘密基地に連れてってくれる予定だったらしい、それについての『ごめん』だったのかな
「では次は僕の番ですね、僕はギル!メリュと同じ3年生!時々名前を間違えることがあるからみんなギルくんではなくギルって呼んでいますよ、よろしく!」
「うん!よろしく、ギル!」
　えっと次は…あっ、僕の番か!
「じゃあ次はぼ「では次は僕の…
「「あっ」」
　小太郎君と声が被り、僕は後でいいよ!と小太郎君に伝える
「ありがとう!僕は風磨小太郎、4年生。この島の不思議な話を色々知ってるから興味があったらお話ししよう」
「うん!よろしく!」

不思議な話…？気になる…

では気を取り直して、僕の番だ

「じゃあ次は僕！えっと、夏休みの間だけキャメロット家に引っ越して来た…えっと、藤丸立香って言います！４年生です！えっと…えーっと、夏休みの間、よろしく、ね！」

…っ

どうしよう、緊張しちゃった。うまく言えたかな…？

そう思ったがそれは杞憂だったらしく、みんなから拍手と共に歓迎されて緊張がほぐれた

「ヨシ！んじゃ次は俺だな！俺は坂田金時！５年生だ、こうして会うのは２回目だな！今度一緒にカブトムシでも捕りに行こうぜ、立香！」

「うん！行こう！よろしく金時！」

次はーーー

「次は俺か。さっきも自己紹介したが俺はカイニスだ、金時と同じ５年生だな、なんかコイツのことで困ったことがあったらいつでも言ってくれ、よろしくな！」

つんつんと、彼の着ている『ぐらんどおーだー』服をつつきながらカイニス君が言う

「…？僕は困ったことなんてしてないと思うよ…？」

「…ま、それもそうか、なんだかんだでみんな楽しんでるしな！」…俺はいつもハラハラ

してるが。
　今、最後に何か聞こえたような…
「…?まぁいいか、最後に僕だね!…そういえば自己紹介、まだ一度もしていなかったよ、ごめんね」
「大丈夫だよ!」
「…え、お前自己紹介もせずに一緒に散歩しよう、とか言ったのかよ?」
　マジかよ、と言うカイニスにいやぁ、知らない人を久しぶりに見かけてつい忘れてたんだ、気をつけるよ。と彼は言う
「それじゃあ改めて…こんにちは、立香!僕はキリシュタリア、キリシュタリア・ヴォーダイム。6年生だよ、名前が長いから気軽にあだ名をつけてくれて構わない、宜しく!」
　…8月3日、3日目の夏休みは立香にとって、かけがえの無い友人の出来た日として終わった
　…
　～その日の夜、大こち山の山頂にて～
「かんら、から、から!」
　今にも星が降りそうな夜空の下で、山頂から眼下に見える海や家、学校、船着場を見下ろしながら彼女は笑う

「うんうん、心配で様子を見に来たが…特に小槌のせいで何か問題が起こった、ということは無いようだな！安心安心！」

花の魔術師が『何も言わずに小槌を貸してくれないかい？』と言ってきた時には何を企んでいるのかと勘ぐったものだが…うん、これならいい！

「来て日の浅い僕でも分かるほど、僕の弟子は少々頑張りすぎだからな！羽を伸ばせるのはいいことだ！」

「そ、そうですか？ありがとうございます、お師匠様！」

「遮那王では無いわ！全く…」

そんなぁ…と、しょげる遮那王。

…ちなみに今彼女（遮那王）は僕の振るった小槌の力で手のひらよりも小さくなっており、ついでに言えば虫かご（鬼が全力で殴ってもちょっと傷が付くくらいで済むような超耐久力）の中に閉じこめている

うん？何故かって…脱走しないようにだが？

「お師匠様ぁ～私も主人殿達と遊びたいです～」

「だ、め、だ！例え小槌で記憶と肉体年齢を調整したとしても、お前は加減というものを知らん！

…師匠である僕が断言しよう、お前がここで皆（みな）と遊べば3日も経たんうちに遮那王以

外全員疲労死だ!」
　全力で遊ぶのが遮那王だ、ついていける者は極少数であろう
「お師匠様、いくら私でも加減くらい心得ています!」
「…なら聞くが、この時間帯、お前は何をして過ごす?」
「それはもちろん!日が登るまで皆と野山という野山を駆け抜け、日が登ったら海で鮫捕り合戦をーーーあいたっ!?」ゴンッ
　…僕の思った通りじゃないか!
　フタを開けるわけにも行かないので虫かごを揺らして遮那王の頭をぶつけさせる
「ほれ見たことか!…さて、小槌の力も問題なさそうだし、そろそろカルデアに戻るぞ」
「そ、そんな!お師匠様、慈悲を!どうかこの私に慈悲を!」
　無い!ときっぱり言い切って僕たちはカルデアへと戻った…

8月4日　あっち島上陸！

あっち島とこっち島間の海にて…

「ぶぶぶ…」

そろそろ息が苦しくなってきたのと、持っているネットが重くなって来たので水面へ急ぐ

「ぷはっ、結構たくさん見つかった！小太郎くんはどう？」

「うーん、僕の方はあまり集まらなかったよ、残念だけどそろそろ上がって休憩しよう」

太陽がもうすぐ空のてっぺんにかかりそうなところで一旦休憩に入ろうと小太郎君が言う

そう、今日は朝から小太郎くんと一緒に空き瓶集め！あっち島に行くための乗船券のお金を貯めるんだ、今のままでも足りるんだけどモルモルに『リッカ、何事も余裕を持った方が良いですよ』と言われて空き瓶探しに。

ちなみにメリュに教えてもらった通り海の中には沢山の空き瓶があった！

でも小太郎君の持ってる2，3本瓶が入っただけのほぼぺったんこなネットを見るに場所によって多い少ないはあるみたいだ。ちなみに僕の収穫は…

海に入る前にアロハ兄貴からもらったネットの中身を確認する…
「ビール瓶2本、ジュース瓶4本、大ジュース瓶1本!」
1本につきビール瓶が5円、ジュース瓶が10円、大ジュース瓶が30円だから…
「80円だ!」
元々持ってきたお小遣いが100円だから、うん!これなら乗船きっぷ（30円）を買っても150円残る!…モンスターチョコでも買おうかな?
何より大ジュース瓶を拾えたのが嬉しい、滅多に見つからないらしいから拾えたのはラッキーだ!
「立香くん、沢山拾ったんだね!僕はこれだけだよ」
「見せて見せて…げ!」
見たこともない瓶だけど引き取ってもらえるかな…?なんて言う小太郎君のネットには大ジュース瓶が3本!
「…」汗
メリュが言うには滅多に見つからないハズのレア瓶なんだけど…
「んー…?」
ここで僕、計算してみる…
僕　ビール瓶2本+ジュース瓶4本+大ジュース瓶1本

＝　８０円
小太郎君　大ジュース瓶３本
＝　９０円
・・・
なん…だと…!?
「おーい、立香くん！上がろうよ～」
敗北という事実にフリーズしていた僕は小太郎君の声で再起動！海から上がり、２人でＮＦＦ商店へ向かうのであった。
～
「はい、確かにお引き取りしました♡他に何かご入用はございますか？」
「じゃあモンスターチョコ１個下さい！」
「はい、まいどあり。またのご利用、お待ちしております♡」
瓶を引き換えてもらい、モンスターチョコ…モンチョコを購入
…お？僕とかわりばんこで瓶を引き換えてもらった小太郎君もモンスターチョコを買ったみたいだ
「せっかくだから後で一緒に食べよっと」
駆けてきた小太郎君にそのことを言うと、じゃあ船の上で食べよう！という話にな

り、開けかけたモンチョコの箱を閉じて潮待ち桟橋へと2人で向かった

〜

「アロハの兄貴!」

「ん?おっ!立香に小太郎じゃねーか、よー!瓶はいっぱい取れたかい?」

よー!とさっぱりな挨拶をしてくれる兄貴に、よ!と2人そろって答える

「うん!今NFF商店で引き取ってもらったところ!それでお金も貯まったからあっち島に行こうってなってね!」

「なるほどな、俺の船に乗りに来たのか!」

うん!とまたも2人揃って答え、乗船券分の30円をそれぞれ兄貴に差し出す

「あーいらねいらね!それは友達と食う菓子にでも使いな、どーせ向こうに行く用事あったし、タダでいいぜ」

「ホント!?」

またまた揃う2人の言葉。それに兄貴は、おう!ホラ乗った乗った!と船の上へと早足で歩いていく

ラッキーだね!と小太郎君と話しながら僕らも船の上へ。

「よし、乗ったな?んじゃ!出港!」

ボォー!と汽笛が鳴って船が動き出す。

船に乗るのは初めて…だったっけ?よく思い出せないけど多分こういう船に乗ったのは初めてだったと思う。
そんなことを考えながらポケットの中のモンチョコに手を伸ばす
「小太郎君、モンチョコ食べよう!」
「そうだね!」
「ん?おー、モンチョコか。俺も今朝買ったやつがあるから一緒に食べよーぜ!あとゴミ箱はこっちにあるから、ゴミは落とすなよ?」
はーいと返事をして3人で一緒に食べることに。
…?あれ、じゃあ今この船誰が操縦してるんだろう?
そんな疑問が口から出る前に兄貴が言う
「ああ、正直なところ船っつーより島間だけの運び屋みたいなもんだからな、俺が操作するのは島に近付いた時だけでいーのよ」
「なるほど」
納得しつつモンチョコの箱を開けて中身を物色。これの凄いところはモン消しだけでなくチョコにも沢山の種類があるということだ、形や味はもちろん量が変わることもあるからこれは重要なのだ
さて僕のは…

「ハート型だ!はむ」
ハート型のシンプルなチョコ、チョコも厚くてとっても美味しい!
こんな風に大抵当たりといえるチョコが入ってるんだけどたまーに…ね
「僕のは…え、コレ…誰かがかじった後があるような…」
小太郎君が箱から取り出したのはあきらかに『一口食べました』と言わんばかりのチョコバー…
うん、こう言う時もある。
「わはは!そんなのもあるのか!んじゃ俺も…どれどれ…ん?なんだ?熊か、熊のゆるキャラかコレ?」
笑う兄貴が箱から取り出したのは熊のぬいぐるみ…がそのままチョコになった様なものだった。
「クーさんの言う通り、ゆるキャラをモチーフにしたチョコかな?」
「うーん、どうだろ?」
多分チョコだと思うけど…なんだかアレを見てると胸騒ぎがするというか、食べない方がいいような気がするというか…
「それ食べるの?」
「まーチョコだしな、食えるだろ!」

「…ケテ……タス、ケテ……」
「…？クーさんなんか言った？」
「んあ？何も言ってないが」
小太郎くんにも聞こえたんだろう、言葉は聞き取れなかったが今確かに兄貴の声が聞こえた
「あれ、僕にも聞こえたんだけど…兄貴何か言ったでしょ？」
「いやいや、なーんも言ってねえよ。…それよりこの熊チョコ、食いづらい形してんな…お、首のとこ、ちょっと力入れりゃあヘシ折れそうだな」
「!!」ピクッ
え！
「・・・」じぃー…
思わずその熊チョコを見つめる
……
い、今あの熊チョコが震えたような…
「ん？ああ、そろそろ対岸に着くぜ、チョコは後だな」
チョコが入っていた箱の上に熊チョコを置いて兄貴は操舵席へ、といってもやることはそこまで多くなさそうだけど。

「おーし、ついたついた!んじゃ18時までには戻ってきな、それより遅くなると保護者が心配するからな!」
　兄貴が言うと同時にバコッと船の安全板が開く
「兄貴ありがとう!」
　こうして僕と小太郎くんはあっち島へと上陸した!
「おいおい、待て待て!忘れモン、無いか?」
　意地悪そうな顔で言う兄貴の手元にはモンチョコの本命ともいえるモン消しが。
「あっ、忘れてた!」
　小太郎くんは忘れなかったらしく、僕を待っている
「ほらよ、なくすなよ?」
「うん、兄貴ありがとう!」
　兄貴にもう一度お礼をいってモン消し『ナルガクルガ』を受け取る
　おー、中身はナルガクルガだったんだ
　梟みたいにデフォルメされた2頭身の小さなナルガクルガのモン消しをポケットにしまい、小太郎君と一緒に島へ入っていく
「うーい!気をつけて行けよ〜…さてと、チョコ食いますか」
「アッ、ヤ、ヤメーーー」

「つしょっと」ポキ
「キャン」
〜
「ねぇ小太郎くん、昨日言ってたこっち島の不思議な話さ、どんな話があるの？」
造船所の前を通り過ぎたところで小太郎くんの自己紹介にあった話を思い出したので聞いてみる。
「うん？ああ、色々あるよ！それに不思議な話はこっち島だけじゃないよ？今いる場所…あっち島の話とかもあるし」
「聞きたい聞きたい！」
造船所を過ぎ、坂道を登りながら小太郎くんに話をせがむ
「うん、じゃあこの島の女神様達の話をしよう、この島の奥に小さな神社があるんだけど…そこの神様達は来た人の今日の運勢を教えてくれるんだ」
「へぇー！」
神社に女神様…というのもなんだか変なカンジがするけど…
「どんな姿してるの？」
「それが誰も見たことが無いんだ、みんな声は聞いたことあるから女神様達のことは信じているけど…」

「え?えーと…」
　きっとその神社の巫女さんとかが神様の格好をして占いしてるんだろう、なんて思ってたけど誰も姿を見たことが無いなんて不思議な話だなぁ
　混乱する僕の顔を『やっぱりそうだよね』って顔で見ながら話を続ける小太郎くん
「やっぱりそうなっちゃうよね、でも天気さえ良ければ女神様達はいつも神社にいるから姿は見えないけどいつでも会えるんだ。ね?不思議な話でしょ?」
「ねえ」
　色々質問したかったけど『いつでも会える』なんて聞いたらそんな考えも吹き飛んだ
「…今日行ったら会えるかな?」
「天気がいいから会えると思うよ!…姿は見えないだろうけど」
　…ヨシ!
　ならば善は急げ、である!
「さっそく行ってみよう!神社ってどこにあるの?」
「案内するよ、ついて来て立香!」
　そこから2人でしばらく歩いていくと…
「あっ、ねぇ小太郎君、あれかな?」
　高台の上に建てられたやたら立派な建物が少しだけ見えたので聞いてみる

「違うよ、あれはキリ君の家だね。やっぱりいつ見ても大きいな」
「うえっ？キリくんの？でっかいなぁ…」
木が邪魔でよく見えなかったけどこうして見ると神社みたいに…いや神社より大きいんじゃない…？
「じゃああれもキリくんの家の？」
高台に建てられた立派な豪邸に続き、今度は立派な池が目に入る
「うん、多分…でも魚がいないな、池ならいると思うんだけど…」
「確かに…」
池の水は濁って底がよく見えないが魚がいないのは間違いない、こんな立派な池なのに…？
「ンンンンン！魚がいないのは当然のこと、その池は魚を放すためのものではございませんので」
「わっ!?」
背後からいきなり聞こえたでっかい声に僕たちは揃って飛び上がる！
「…っ！おまーーーゴホン！芦屋道満、さん、でしたか…驚かさないでください」
「おっと、申し訳ありませぬ小太郎殿。して…ああ、そちらは先日キャメロット家に来た子でございますね？

初めまして!拙僧、キリシュタリア殿の元で使用人を勤めておりまする、芦屋道満と申します。以後お見知り置きを。」

「り、立香です、はじめまして。それでえっと…魚を放すためのものではない、っていうのは?」

大きな声にも驚いたけどそれよりも道満さんの格好に驚いた!

陰陽師?って言うのかな…この暑さの中でたくさん着込んでいるのに汗かいてないや

「ンンンンン!至極単純明快!この地域は雨が滅多に降る事がありませぬ、故にこうして池を作り雨を貯めているのです。備えあれば憂いなし、でございます!」

「なるほど…」

道満さんの説明にうんうんと納得しているとチョンチョン、と肩をつつかれて振り返る

「小太郎くん?」

「立香、彼とはあまり関わらない方がいいよ」

…?

いきなりそんなことを言い出す小太郎くん。もちろん僕の頭の上には《?》マークが

「なんで?」

「え？だって…うーん、なんとなく…この人とは絶対に分かり合えない感覚っていうか…」

ええ…

確かにその人にとって相性のいい人間、悪い人間はいるけど感覚だけで毛嫌いするのは違うと思うなぁ

「流石にそれはこの人が可哀想だよ、それに僕はこの人のこと何にも知らないし。」

「おお、おお！幼いながらも思慮深い。拙僧、感激でございまするぞ、マｓ　立香殿！」

ぎゅっ、なでなで

言うが早いか道満さんが頭を撫でてくる！

「??!!」ぞぞぞぞっ

…悪寒がして一瞬時間が止まり、そしてーーー

「ーーーうん！そうだね！じゃあ僕らはこれで！行こう、早く行こう小太郎くん！」

「う、うん？うん、行こうか。」

ぐいっ、とまず僕をハグしてた道満の左手を押し退け、次に頭を撫でていた右手を押し退けて小太郎くんと一緒に超早足で島の奥へ！

「ンンンンン！拙僧も嫌われたものですねぇ！…まぁ今は夏休みなるものを楽しめばよろしいでしょう！ンンンンン!!」

～

「立香君、分かった?」

「うん《即答》」

前言撤回、怪しい人だ!間違いなく怪しい人だ!でなきゃ初対面の相手をハグして頭を撫でるなんてどー考えてもおかしいしなにより…なんか、こう…気分悪い。

多分小太郎くんの言っていた感覚というのはこういうことなんだろう、と思いながらふと顔を上げると前方に鳥居が見えた

「ねぇ小太郎くん、こんどこそアレが…」

「うん、僕らの目指していた神社だね、立香がいきなり走り始めたからあっという間に着いたみたいだ」

え?ホント?だとすると僕無意識で走ってた?それはちょっと怖いなぁ…

まぁそれはそれとして。

気分を切り替えて鳥居を潜る

「ここに女神様達が?」

「うん、鐘のところに行ってみて」

「…?うん」

言われるがままに鐘が垂れ下がったところの前へ、するとどこからともなく声が聞こ

えてきた…っていうか目の前に紫色の髪をした1人の女性と2人の少女（2人の少女は鏡合わせみたいにそっくり）がいきなり現れた！

そういえば女神様『達』って言ってたっけ…この3人が神様なのかな？

「まぁ…みて私？小さな参拝客がやってきたわ」

「ええ、本当ね私。それじゃあまたメデューサ『で』占ってみましょう」

僕を見てくすくすと笑う少女…そっくりだからややこしいな、何も持ってない少女がくすくすと笑い、弓？みたいなものを持った少女が弓とは別に小槌のようなものを取り出す

「あ、姉上方…やはりその…作り物とはいえ他国の神を祀る場所に居座って占いなど始めるのはいけないことだと…お、思うのです、が…」

絞り出すように2人の少女へ注意の言葉を投げかけるお姉さん。

…それを聞いて振り返った2人の少女に見つめられてどんどん小さくなってるけど…

「あらあら、大きいのは身体だけじゃないのねメデューサ？」

「ええ、ここに来てとっても偉くなったのねメデューサ？」

「そ、そんな、そのようなつもりは全くーーー」

ぽこしゃん！

「あっ!?」
直後、弓の少女が小槌を振り下ろすが早いか小槌が間抜けな音を立ててお姉さんの頭に命中する!
変な音だなぁ
音のせいなのか全く痛そうに見えないのでなんとなくそれを傍観する僕。
お姉さんの断末魔（？）と共にボフンと煙が出て、忍者の使う忍術のように女性の身体を隠す、そしてーーー
「わっ!?」
ずずん、と凄い音と振動を立てて下半身が蛇の大きな大きな女性が現れた!…面影があるけどもしかしてさっきのお姉さんなの…?
「あらあらあら、さらに大きくなるなんて…本当に偉ーくなったのねぇ、メデューサ?」
「ひいいい…」
「・・・」ぽかーん
正直見た瞬間は怖かったけど中身はさっきのお姉さんのままらしく、お姉さんは大きな身体に似合わず頭を抱えてオロオロとしている…
それをなんとなく見ていると弓の少女が話しかけてきた
「さ、占いは終わったわよ? いつまでも立ってないで帰りなさいな?」

「え、あ、うん…さ、さよなら～…」
結局占いの結果はなんだったのか?それを聞こうと思ったけどなんとなくお姉さんみたいになる気がして僕は何も聞かずに神社から出た
「おかえり立香、どうだった?」
「うん……凄い神様だった」
…後で知った事だけど神様の姿を見たのは僕だけらしくて、他の人はみんな『随分と小さくなったわね、じゃあ今日は小吉ね』みたいに声だけ聞こえるものらしい
また、神様を見た!と言った僕の言葉は小太郎くんは信じてくれたが、後日みんなに話してもキリくん以外は信じてくれなかった…ホントに見たのになぁ…
…8月4日、4日目の夏休みは神様に、それも3人に会うという不思議な出来事に遭遇して終わった

8月5日　虫捕り

エミヤおばさんちの庭…

「…」なでなで

「…♪」

もふもふと、立派な毛並みをした白い犬。それを座り込んで撫でるモルガンは思いついたように犬に指示を出してみる

「お手」

「…！」ささっ

「伏せ」

「…！」ぺたっ

「あご」

「…！」ぽふっ

「もふもふ」

「…！…!?」オロオロ

もふもふと言われた途端犬がオロオロし始めるのが分かった、多分教えていない芸な

んだろう
「モルモル、多分タイコーが困ってるよ？」
「…ふふ、少し意地悪をしました。これは謝罪の代わりです。」
そう言うとモルモルは器用にタイコーの両前足を肩に掛け、ハグするように背中を撫でる
「ワフッ♪」
ブンブンと尻尾を振るタイコー、ものすごく嬉しそうだ
僕も撫でたいな…
「リッカも撫でますか？」
「…！うん！」
ぽふっと降ろされたタイコーは『なんの話？』と言いたげに首を傾げていて、僕はその頭をそっと撫でてみた…
「…」
タイコーは少しだけびっくりしたように体を震わせたがすぐに落ち着き、特に何かするわけでもなく、じーっとしてる…
…タイコー、あんまり嬉しそうじゃないなぁ
「まぁ…リッカは来たばかりですしタイコーが驚くのも仕方ないでしょう。…おや？…

リッカ、お友達が来たようですよ」
「？」
友達？…近くには誰も居ないけど…
あたりを見回してもタイコーとモルモルだけ、他には誰もいない
「ふふ、もう来ますよ？」
「？？？」
ますます『？』になっていると不意に門の方から声が聞こえてきた
「うおーい、立香～！虫捕り行こーぜ！」
この声は…
またね、とタイコーとモルモルに手を振って表に出る
「よう！」
「金時！…とプロテアちゃん？」
「えへへ、こんにちは！」
表に居たのは金時とプロテアちゃんだ、２人とも虫かごを方から下げ、虫あみを手に持っている
と、いうことは…
「今から何しに行くかは…ま、言わなくても分かるよな？どうだ、来るか？」

「もっちろん！」
ドーン！と突っ込む勢いで家の中へ！
階段を駆け上がり、部屋の中にある虫あみと虫かごを引っ掴んで外へ出る！
「2人とも！おまた…せ？」
アレッ、1人増えてるような…
「……」ジトー
「…メリュ？」
プロテアちゃんの前にずいっと立ち塞がるよう立っていたのはメリュ。彼女も虫あみと虫かごを持っている
というか凄い…なんていうの？不貞腐れ顔？これがマンガだったら頭の上に『ムッスー』って文字が書いてありそうだ
「…なに？」
「怒ってる？」
「ぜんぜん」
「…？そう？」
「……」ジトー
うーん…

～5分後～

「金時、カマキリは虫相撲に参加できるの？」
「ん？メリュが捕まえたのはオオカマキリか。ああ、参加できるぜ！他にもカナブンとかカミキリムシとか…まぁそこんところは俺に聞くより小太郎やキリシュタリアに聞いた方が確実だな」
「うーん」
「りつか、どうしたの？」
「…いや、なんでもないよ」
機嫌直った…？手を繋いだくらいで特に何もしてないけどあのジト目は無くなったし…ま、直ったならいいや！
そんなこんなで精霊の木の前で僕、メリュ、プロテアちゃん、金時の４人は虫捕り中。プロテアちゃんの背が高くて高いところの虫も捕まえられるからもしかしたらカブトムシとかも見つかるかもーーー
「ーーーしれないんだけど…プロテアちゃん、あの虫なんだろう？ヒラタクワガタにしては大きい気がするし…」

「どれ？あれかな？うーん…近くで見ないと分からないね…でもちょっと高くて私でも届かないよ…」

精霊の木、そのかなり高い位置で樹液を吸ってる1匹の大きな虫、真っ黒に光るその虫はクワガタにしては明らかに大きな体で周囲の虫を寄せ付けてないあたりが物凄く…うん、物凄く凄い気がする。

「まるで王様だ…」

どうやって捕まえようかと話していたら向こうのほうで虫捕りしてた金時とメリュがこっちにやってきた

「どうしたどうした、2人して見上げて…ん？なんだあの虫…？おいメリュ、お前はあれがどんな虫か知ってるか？」

「…見たことない虫だね、でも体が大きくて凄く強そうだ。捕まえたい。」

「でも流石に高すぎるよ、プロテアちゃんの虫あみも届かないんじゃ捕まえられない。」

「ふ、立香。私なら捕まえられるよ？」

「「えっ」」

『この中で1番身長が低いのに』とメリュ以外の全員が思ったに違いない、でもメリュはふふん、と得意げに胸を張って言った

「身長が低くても捕まえる方法はある。アレを見て。」

ピシッとメリュが指を刺したのは墓地とこの精霊の木の広場を仕切るブロック塀、高さはプロテアちゃんよりちょっと高いくらい？
「…？で、どうするの？」
「まぁ待ってよ、金時。手伝って欲しい。」
「俺？まぁいいが…肩車でもするのか？」
「違う。えっと…ここ、この場所で馬跳びの馬の姿勢になって。」
「???分かったぜ。」
ブロック塀の角の部分と精霊の木の…丁度中間あたりで馬跳びの姿勢になる金時
「ありがと、後は…よい、しょ…」
そしてそれを確認してブロック塀を器用によじ登るメリュ
「お、おい！」
「メリュジーヌさん、危ないよ！」
「静かに。金時も姿勢を変えないで…さぁ！行くよ！」
ま、まさか…
精霊の木から遠ざかるようにブロック塀の上で何歩か後ろに下がり…そしてーーー
「はあっ!!」
助走をつけて踏み切った足と強い掛け声、そしてそれに似合わない、タンッ…とした

綺麗な踏切音
「ま、マジか!?…んぐっと!」
トンッ、金時の背中を足場に跳躍!届かないと思ってたあのクワガタにメリュが迫る!
「…ッ!よしっ!捕まえた!」
左手、右足、左足でびし!とセミのように木にしがみつき、残った右手であのクワガタをメリュが捕まえた!
「お、見てくれカイニス。こういう時はほら、サバチューブに載っていた…『すげぇジャンプ力だ!』って言うんだっけ?」
「キリシュタリア、お前元がどんなのか知ってて話してるのか?」
「うわっ!キリシュタリア!カイニスも…お前らいつからいたんだよ?」
「さっきだよ、それよりも…うん。」
「?」
ずりずりずり~と降りてくるメリュを…正確にはメリュの右手をキリ君が興味深そうに見てる
「…あ」
ここで僕はこの前あった出来事を思い出した

確かこの島で捕れる虫の図鑑を読んでたって言ってたし…もしかしたらあの虫のこと、知ってるかもしれない
「立香、どうだった？この『僕』の虫捕りは。」
「うん！凄くかっこよかったよ！…でも危ないからもうしないでね？」
「善処するよ、さて最初に見つけたのは立香だったし、この虫は君に捧げよう。」
「ささげ…？あ、くれるの？ありがとう」
メリュから謎のクワガタを貰って虫かごに入れる、前にとりあえず…
「ねぇ、キリ君。この虫が何の虫か知ってる？」
キリ君に見せてみる。
「この虫は…うん、初めて見るけど図鑑には載っていたから知ってるよ。『オオクワガタ』だね。とても珍しい虫だよ」
「これがオオクワガタ…」
「うおっ、マジか！普通のクワガタじゃねぇとは思ったが…」
「これがオオクワガタなんですね、たしかに普通のよりおっきいです！」
驚く金時とプロテア、そして得意げな表情でピッタリ僕の横にくっつくメリュ
…ちょっと暑いな
「はっ！立香も虫を持ったし丁度いい！今から秘密基地で虫相撲ってのはどうだ？」

カイニスくんが言う
それに、おーそりゃいいな！うん、やりましょう。僕…いや私も賛成するよ。とみんな口々に言う
確かに、せっかく虫を捕まえたんだ。虫相撲とやらをやってみたい！
「うん、僕も虫相撲してみたい！」
「っし、決まりだな！んじゃ金時、お前は小太郎を呼んできてくれるか？ギルはさっき見かけたし俺が呼んでくるからよ！」
「よし、任せとけ！…っーわけでお前たちは先に行っといてくれ！」
「「「はーい」」」
～
秘密基地にて…
「んがっ！クッソ、マジかよ!?」
「強い…」
人生初の虫相撲は圧勝の２文字だった、凄い力でオオクワガタがぐいぐい相手の虫を押し出すから負け無しだった
「あー、負けた負けた！こりゃうかうかしてらんねーな小太郎！」
「うん、そうだね金時君！」

「私も、もっとこのハンミョウが強くなれるように頑張らないと…」
「焦っても虫は強くなりませんよプロテアちゃん、まずどうして負けたのかゆっくり考えましょう」
「そう?そうだね!ありがとうギルくん!」
「マジかよ、俺のノコギリクワガタが…」
「ははっ、なに…1度や2度の敗北で虫の強さは測れないさ、カイニス。」
　金時のカブトムシ、小太郎君のウスバカミキリ、プロテアちゃんのハンミョウ、ギル君のヒラタクワガタ、カイニス君のノコギリクワガタ、みーんな1匹ずつ押し出して、大勝利を飾った僕のオオクワガタ!…あ、キリ君はまだ虫捕まえてなくて出来なかったよ。
「凄いじゃないか立香」
「メリュのお陰だよ、ありがとう!」
「ッ……そう、立香が喜んでくれてよかった。でも気を抜いたらダメ、みんな立香に感化されてもっと強い虫を捕まえたり、育てたりしてくると思う。」
「もちろん!僕らも一緒にこのオオクワガタを強くーーー」
「…?立香、先に言っておくけどオオクワガタの育成は私手伝わないよ?」
　私もこのミヤマクワガタを育てないといけないし…と衝撃の事実をメリュが言う!

「と、いうことは…もしかしてメリュ？」
「うん、立香…私は君とも戦いたい！…虫相撲で、ね？」
…8月5日、5日目の夏休みはオオクワガタというかっこいい虫との出会い、そしてメリュの、虫相撲の宣戦布告を受けて終わった。育成が楽しみだ…